

「地域を支えたい」という 気持ちを応援

西澤卓也
27歳



朧月村の十軒 寄り添ひぬ

相馬聖一
68歳

私が縁あって小国に引っ越してきたのが平成7年でした。私は退職後、民生委員をきっかけに、地域活動を始めました。この地域の高齢化の大きな引き金となったのは「3隻の黒船」がやってきた事です。それは、平成16年の中越地震、平成16年豪雪、そして平成17年の合併です。合併の前は役場に言えば何とかなっていました。

しかしこれらの事をきっかけに、行政に頼るだけでなく、地域内でできる事は自分たちで行おうと仲間たちと活動を始めました。芝ノ又、八王子地域の課題を自分達なりに受け止め、自分達のできることを始めました。しかし、活動にあたっては専門的な知識を持った支援者がいなければ地域で新しい事業に挑戦するのは難しいと感じたのも事実です。支援員である西澤さんは本当に親身になって集落の活動を後押ししてくださっています。だからこそ私たちもこうした活動に取り組んでいるのだと思います。

それぞれが身の丈に合った貢献と人を思いやる気持ちがあれば、限界集落だってまだまだ捨てた物ではないと感じます。

※「朧月(おぼろつき) 村の十軒 寄り添ひぬ」は、相馬聖一さん(俳名・相馬行子)が集落を想い詠んだ俳句です。

「3隻の黒船」の襲来から立ち上がろうと日々活動をしている芝ノ又・八王子集落など、小国地域では様々な団体が様々な活動を行っています。地域復興支援員に求められている役割は、①地域の力を引き出すこと、②引き出した力と外部の力を引き合わせるこの2つだと思っています。①は、地域に寄り添って何が課題なのか、何が魅力なのか、どんな人がいるのか、その場の個性を整理して地域内で共有するという役割、②は地域の個性に合うような取り組みをしている外部団体などを紹介するという役割です。芝ノ又・八王子集落では、集落の活動計画づくり、克雪対策の検討会、中学生や都市部の方々とのまちづくり活動など、いろいろな楽しい取り組みの仲間として加わらせてもらっています。

II 市民協働 story II

最盛期には37軒200人余りの芝ノ又でしたが、今では5軒16人の小規模集落となりました。平成13年頃から危機感を持ちさまざまな事業に参加し集落の活性化に取り組んできた地域です。しかし、高齢化が進み労力不足が顕著にあらわれてきました。そんな中、地域復興支援員、NPO、大学生、隣集落の力を借りて地域の存続に努めています。また、このような支援者がいなければ地域で新しい事業に挑戦するのは難しいとも言われています。地域復興支援員は、地域が行う復興に向けた取り組みを支援するという仕事です。実際の活動は、住民の声に耳を傾け、一緒に笑い、縁を広げて、活動をちょっと楽しくすること、ほかの人に集落の活動や魅力を伝えることなどを行っています。